

ライマン雑記(20)

副見恭子¹⁾

1. 帰国

明治13(1880)年12月22日, ライマンは, 上海行きTokio Maruで, 多くの日本人と別れを惜しみながら横浜を発った。明治6(1873)年1月18日, 独り横浜の土を踏んだ8年前とは異なった光景であった。

翌1881年1月13日, 上海を出発し, ヨーロッパ経由で母国へ向かった。インドで2週間, フランスで1ヵ月と旧交を温めたが, 7歳上の姉エリザベスの病が重いのを聞き旅を切り上げ, 5月16日にニューヨークに到着, 19日に故郷ノースハンプトンに戻った。8年ぶりの新緑に輝く故郷に感慨一入であったろう。

2. 赤れんがの家

やがて, ライマンは赤れんがの家を購入した。エリザベスの一進一退する病が, 購入理由のひとつであった。また, 懸案の「日本油田地質地形図」を仕上げるのに, 持ってこいの静かな美しい町だったからではないだろうか。それとも, 壮麗な邸宅にすっかり魅惑されたのかもしれない。現在この家は, 名門スミス大学の寮パークハウスの一部として残っている。寮の歴史によると, 刃物会社を創立して一代で富を築いたノースハンプトンの知名人W.T.クレメントが1880年に建てている。当時, 世界的ソプラノ歌手でスウェーデンのうぐいすと呼ばれたジュニイリントが, ノースハンプトンを訪れた時, 「アメリカの楽園」と感歎した風景の中心にこの家が建っていた。南西側には広々とした池があって,



第1図 赤れんがの家, 森本貞子女史と共に。

ここは今でも「楽園の池」と呼ばれ, スミス大学を訪れる人々や学生たちの憩いの場所である。四季を通して実に美しい。

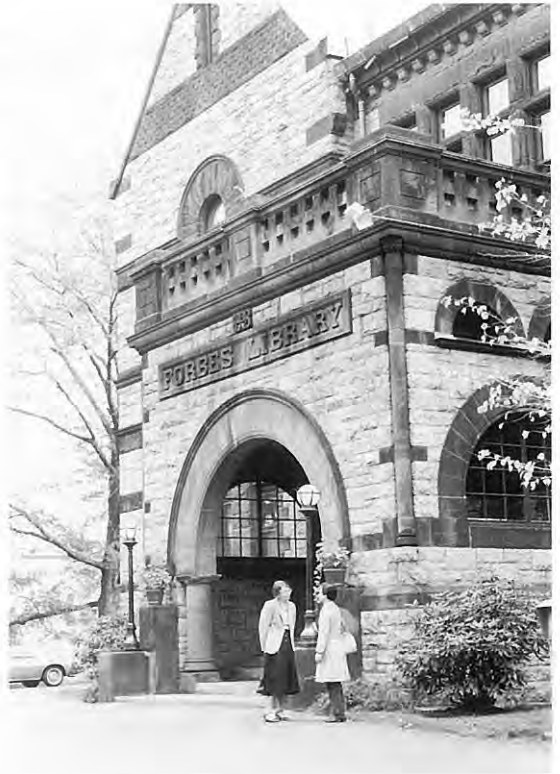
クレメントが1882年に死去してから十数年, 家主が度々変わったと記録されているが, 次の二通の手紙から, ライマンはクレメントの生前に, 赤れんがの家を入手していることがわかる。

「八月二十一日ノオテガミ今月十七日ニツキマン

1) 元マサチューセッツ大学東洋コレクション司書:
8 Eaton Court Amherst MA 01002 U.S.A.

キーワード: ライマン, フィアデルフィア, 中嶋徳松

タ マコトニ アリガトウゾンジマス」から始まる島田純一の明治14(1881)年10月27日の手紙に「アナタノア子サンノゴビョウキハ モハヤヨクナリマシタカ アナタノオカヘリニテ ア子サンモ オヨロコビナサイマシテ ハヤクヨクオナリナサイマシヤウトゾンジマス ヨキイヘヲオカイナサイナマ(ママ)シテオメデタウゾンジマス」(あなたの姉さんのご病気は、もはや良くなりましたか あなたのお帰りにて 姉さんもお喜びなさいまして 早く良くおなりなさいませうと存じます 良き家をお買いなさいましておめでとう存じます)と書いている。もう一通は、秋山美丸夫人宛で、1881年にライマンがカナで書いた手紙である。



第2図 フォーブスライブラリー。

— コノアイダ イヘヲ カイマシタカラ ジキニ ソレノシタクヲデキテ ミナミナ ホンバコトモニ アケテダシマシヤウ ソノ イヘハレンガセキノイヘデゴザリマス マタワタシノタメニ アマリオホキクテソノ三分ノニ アルヨイヒトニヤトワレテモマダワタクシノキャクノタメニコロガタクサン ゴザリマシヤウ ソレデ モシアナタタチ アメリカニ キマスレバ ワタクシノキャクサマニ ナリマシテハヨウゴザリマス マタソノレンガセキノイヘノホカニ ニツノチサイトナリキノイヘヲヤハリカイマシタ ミナハヨホド ウツクシイケシキヲモツテイマス スベテコノマチトザトヨイケシキニツイテナダカウゴザリマス コレマデア子ノ大ビヤウノユエニ ワタクシハヨホドシズカニ ココニスマイマス(—この間 家を買いましたから 直に それの支度をできて みなみな 本箱と共に 開けて出しましょう その家は 煉瓦せきの家でござります また私のためにあまり大きくてその三分の二 ある良い人にやとわれても(貸しても?)まだ私の客のためにところがたくさんござりましょう それでもしあなたたちアメリカに きますれば 私の客様になりましてはようござります またその煉瓦せきの家の外に二つの小さい隣り木(?)の家をやはり買いました 皆はよほど 美しい景色をもっています すべて この町東西とよい景色について名高うございます これまで姉の大病の故に 私は余程 静かに ここに 住まいます)

ライマンがラクサマと呼んだ秋山の妻は、明治初期の日本女性としては珍しくごっくばらんなタイプだったので、彼に重宝がられた。

帰郷した翌日からライマンは、中国語とイタリア語の勉強を始め、学究生活に戻った。しかし、日中は、町役員会をのぞいたり、夜はダウンタウンにあるオペラハウスで、ギルバート/サリバンの「ピナホー」を観劇したり、伯母ソフィアスミスが創立したスミス大学を訪れ、時計台の上までのぼったり、故郷の生活を楽しんだ。しばらくして、フィラデルフィアの伯父伯母レスリー夫妻を訪問し、バージニア州の鉱山を短期間視察したりする等、彼の生活はだんだん忙しくなっていった。この年の7月初めに、兄ジェームズがニューヨークからやってきて、エリザベス、妹メリーと兄姉妹、久しぶりに集まり独立記念日を祝った。全員集まったのはこれが最後で、12月29日、半年足らずしてエリザベスが死去した。なお、ライマンには、もう一人一歳上の姉ハリエットがいたが、幼児期に死亡している。



第3図 中嶋竹次郎の手紙(フィラデルフィア自然科学院図書館蔵).

3. フォーブス図書館

前述の島田の手紙に「ガツカウエ タクサンノカ子ヲキフシマシタ ヒトリモノコトニハオドロキマシタ 日本ニハナカナカサヤウノヒトハ アリマセン」と書いている独り者とは、チャールズ エドワード フォーブス判事のことである。ライマンが帰郷した当時、ノースハンプトンの町は、2月15日に死去したフォーブスの遺書に関する話題で沸き返っていた。正に、ノースハンプトンに於ける、1881年のナンバーワンの出来事であった。「ガツカウ」とは、図書館のことで、フォーブスが町に新しい公立図書館を建てるようにと22万ドルを遺贈した。非凡人と呼ばれ、多才で豊かな教養人であったフォーブスは、晩年を書物を友に過ごした。

彼は34年余り楽しく過ごしたノースハンプトンの人々に19世紀の革新的思想を、読書によって啓蒙できたらと考え、図書館設立の案を遺書に記した。今日でも、旧習や偏見を打破し、新しい知識を積極的にとり入れる努力をしている自由都市ノースハンプトンに人々が集まり、住み着く人も多い。

筆者は、1977年、アマーストやノースハンプトン

が存在するパイオニア盆地の何処かに、日本の古書が埋もれている風説を聞いた。2年目の1979年10月1日、ようやく探し当て、まぼろしの古書ライマンコレクションと巡り会ったのは、このフォーブスライブラリーの地下室である。

4. 中嶋徳松

桑田智明遺稿「来曼先生閱歴概要」の抜粋を読んだ時に、「——加うるに馬丁の一子徳松を十四五歳の時帰米の際同伴し、家庭の人として習学せしめ、遂に某大学法科を卒業せしめたるに、惜しむべし不幸にして同人は卒業後夭逝せり」(注1)の数行が妙に記憶に残った。月日が経つにつれて、資料が増えると、徳松の全貌がジグソーパズルのように漸次現れてきた。

賀田貞一著「米国地質測量記事」によると、賀田は、1882年3月16日にノースハンプトンに着いた。同夕六時半「ノーサンプトン」ニ達シ来曼氏ノ居處ヲ尋問ナセシニ此処ニハ同姓ノ人多キヲ以テ過テ他ノ来曼氏ノ居處ヲ訪ヒタリ因テ邊来曼氏ト尋子タレハ彼レ親切ニ教示シタリ途中ヨリ童子

輩兩人予ヲ誘導シテ遠來曼ノ居處ニ行キタルハ實ニ外国人ニ對シ懇篤ナルヲ感シ其姓名ヲ聞キ置カントセシニ告ケズシテ去リタリ同所ニハ雪未タ路傍ニアリテ寒氣モ亦紐育ノ比ニアラス此地ハ「ニウ、ヘブン」ヲ去ル北方七十六英里ナリ(ふりがなは筆者による)(注2)

この記述から、賀田の一人旅であると思いがちになるが、ライマンのエルムストリートスクールの質問に答えた手紙によって、徳松が賀田に連れられて来たことがわかる。「拝啓 問い合わせの少年の名 中嶋徳松、年令9歳9ヶ月、住所 私の家エルムストリート ノースハンプトン ベンジ スミス ライマン 敬具」と書いた返事の日付は、1882年3月28日である。徳松は、十日間余り旅の疲れをいやした後、小学校のクラスに加わったとみてよい。

賀田は、約百日間 ノースハンプトンに滞在し、ライマンの「日本油田之地質及ヒ地形図」の完成を助けた。その後7月中旬、ライマンの伯父レスリーの率いる第二次ペンシルバニア地質測量調査に参加するため、この町を去った。

徳松は9歳、まだほんの子供とは言え、アメリカにやって来るには、勇気と覚悟の上の行動であったろう。隣に住むライマンの従姉妹ハンナとフェニーが幼い徳松を引き受け、のびのびと育てた。徳松がペンシルバニア大学の入学願書に母の名を書けず、ライマンが「幼い時に日本からきたので」と弁明している。フィラデルフィアに住んでから、思いをノースハンプトンに馳せたのは、彼がハンナとフェニーに、母のイメージを描いていたからではないだろうか。

分厚いライマン家の系図によると、プルワー姉妹の母は、ライマンの父サミュエルの妹である。彼女らの父は、1842年、溺死し、8年後に母を失っている。その後ライマンの父と母が、親代わりに二人を可愛がった。ライマンはハンナより一歳下、フェニーより六歳上で、幼い時から彼女たちをいたわり、成長してからは、お互いに助け合った。

徳松が初めて楽しいクリスマスを迎える頃には、彼は、皆に可愛がられ、学校の成績は優秀で、クラスの人気者となっていた。

翌年2月8日、賀田は、徳松の父中嶋竹次郎が、前年の12月7日に重病となり、5日後の12日に急死

したことをライマンに知らせた。そして、誰が直接当人に話すべきか相談している。

死の5ヶ月前に、中嶋竹次郎が息子に書いた一通の手紙を米国哲学協会図書館で見付けた。すらすらと流れるように書いたくずし書きの手紙には徳松が読めるようにと一々カナが付いている。竹次郎が妻と別居し、元ライマンの使用人だった(清吉?)の助手として人力車を引いていた頃である。徳松に手紙は東京日本橋通佐内町五番地の中嶋伊三郎宛に送るようにと頼み、身体を大切にし先生のお指図を守って勉強に励むよう繰り返し述べた手紙は、息子への愛情が満ち溢れている。しかし、筆者は、一つの疑問をいだいた。自分達を下拙一同と呼び、謹言、再拝等の敬語を息子徳松に使う中嶋竹次郎は、一体何者だったのであろうか。

徳松の死後半年経った1902年3月9日付けのフェニーへの手紙で、ライマンは、徳松が帰国を決断できなかったのは、彼の家族が日本社会の最下層に属していたからではないかと書いている。彼女は、姉ハンナと共に徳松の最後をみとった。この手紙で、賀田が徳松に彼の父 竹次郎の死を告げたことがわかった。徳松は、号泣し慰めようがなかったと言う。

ミセスマクインに書いた1884年3月31日付の手紙で、ライマンは徳松について述べ、赤れんがの家の暮らしは一人だけでないと書いている。ライマンの帰国が決まると、江戸の使用人達が、子供をアメリカで勉強させたい、手伝いとして連れて行ってほしいかと懇請した。ここで急に手伝い人の必要を感じたので、元馬丁の長男 徳松を呼び寄せた。そして「その少年は、12歳足らずで、最初に期待したよりはるかにうまく育成した。聞き分けよく、当初は全然英語を知らなかったが、今や小学校は成績素行共最高、そして人気者である。町の人々は、独り者の家には、始終こまごまと気遣う妻が必要と言うが、Toku(徳松の愛称)は、教えられた役割をちゃんと果たす。」と述べ、満足した様子がうかがえる。

日本から助手がサンフランシスコに着くと、先ずノースハンプトンに向かう。賀田貞一は百日程、安達仁造は、約一ヶ月、桑田知明は一年近く赤れんがの家に滞在した。賀田がフィラデルフィアから送ってくれた筆とハンカチの徳松の礼状の下書きが

残っているが、アメリカへの長旅とライマン家の滞在によって、徳松に情が移った雰囲気が感じられる。安達の場合は、短期間の滞在であり、英語に自信なく経済的にも不安だったので、徳松と親しくなるどころではなかったようである。桑田は、ライマン家に約十ヶ月、一番長く逗留した。ノースハンプトンを去って数ヶ月は、ライマンへの手紙の末筆にマスターTokuによろしくと書いている。彼のことから、徳松を先生にして英語を学び、アメリカの知識をうんと詰め込んだと思う。

5. 日本人の国民性

ライマンは、帰国後1881年から1885年の間に、地図、報告書、論文を次々に出版した。その中の「日本人の国民性」は、特筆に値する。

この論文について、多くの異論があるが、彼は、日本滞在8年間の記録を基にして書いた。北海道地質調査中、彼は助手たちと寝起きを共にし、平河町の屋敷では数十人の日本人と共に住み、得意の江戸弁で話して東京の町を逍遙した経験、全国地質調査で各地を歩き回って得た見聞が効果を發揮している。

「日本人の国民性」を読む際に、当時、外圧で開国して日浅く、近代文化が欧米から押し寄せ、日本国内が大混乱に落ち入っていた明治初期を認識すべきであろう。地方は未だ封建制度から脱却できず、東京の生活と大差があったことも考慮に入りたい。真実を追求し妥協を許さないヤンキーライマンは、高い基準でしかも厳しく日本人の国民性を記述しているが、論文から日本人への好意が感じられるのは、筆者のみではあるまい。

当時、欧米人による日本人論は、快活にして陽気、礼儀正しく親切、質素等ことごとく美点をほめあげ、日本紹介の域をでなかった。しかし、ライマンは、1885年、すでに日本国民の最たる特徴は、個人でなく社会集団であることを見抜いていた。日本社会構造が集団志向、単一社会、タテの社会であると語られたのは、主に戦後である。ライマンは、この集団社会構造を意識しながら、知性、感性(主に美的感覚)、行動様式に分けて書いた。全体を通じ、日本人の国民性が直観的、皮相的、現実的

THE CHARACTER OF THE JAPANESE.

A Study of Human Nature.

BY BENJAMIN SMITH LYMAN.

In describing the Japanese, or any other people, of course we must not fail to distinguish between those features that depend on the fundamental character and those that are only the result of a certain stage of civilization or enlightenment. In regard to civilization and enlightenment, too, we should not forget that, quite the same as in every other part of the world, all the inhabitants of the country are not equally civilized, and that, while some are highly enlightened, others are still essentially in a state of barbarism. We may also at the outset take it for granted that no nation (except our own, of course!) possesses at once all the admirable qualities of human character, however inconsistent one with another. It is plain, moreover, that a just discriminating account of the Japanese people as a whole will not apply to my excellent friends among them, nor, doubtless, to numerous others who are far more enlightened than the average, or of exceptionally well-balanced natural qualities.

Perhaps the most striking feature of the character of the Japanese is their socialness; for, in comparison with the average of men, they have somewhat less of the instinct of self-preservation or self-help and more of the instinct of association—the two instincts, the self-regarding and the social, as they might be called, that are clearly the two most indispensable for the perpetuation of mankind. Of course, the instinct for association is based on ultimate reasons or secret, and often unconscious, motives that are in one sense selfish, such as the want of aid or protection, and the

第4図 日本人の国民性.

だと繰り返し、個のない上下社会に潜在する特徴である思考力、独創性、自立心の欠如等をよく捕らえている。

日本人の感性については、滞日中親しかつたアーネスト フェロロサの影響が見られず、庶民文化だけを論じ、文学は膝栗毛のような談義本、音楽は三味線や尺八、その他落語、菊人形、踊り、習字、庭作り、と彼が実際にふれた庶民芸術を論じた。フェロロサを魅惑した光琳の梅、法隆寺夢殿本尊、謡曲や能に接していたら、幽遠な日本芸術も論述したのではないだろうか。

最後の行動様式論は、ライマンが経験した無知で権威を笠に着たごう慢な下級yakuninを思い出す記述や切腹、花見、仇討ち、三従の教え、三くだり半等を取り上げた歌舞伎、浄瑠璃、浪花節を思い出す世界を中心に書いているので、彼の見聞記および体験談とみてよい。もし現在、ライマンが現れたとしたら、21世紀の日本をどう受け止めるであろうか。我々にとって、彼の日本人の行動様式論は非常に興味深い。

6. 平河町家屋敷売却

ライマンが1880年12月22日ヨーロッパ経由で帰国する二日前、彼は平河町の土地1,099坪、平家138坪、付属する長屋土蔵家具すべてを助手たちの地質学社に寄付した。翌日の東京を発つ日、すでに山内徳三郎が北海道開拓使に勤めていたので、賀田貞一にこれらの土地家屋を5年間はライマンの最終的同意がなければ売却しないようにと書いた手紙を手渡した。助手たちと日本地質学のため、家が地質関係の書籍や標本の資料館として、将来役立つことを願った。

ライマンコレクションの中に売却に関する1885年8月6日付けの草稿が残っていて、これには「投函せず」と書かれている。「遠くにるので、諸事情をすべて知るの不可能だが・・・売却するのは望ましくない」の部分は線で消され、続く文も消したり加えたりして読みづらい。何事も理論明せきを好むライマンは、修繕費が殆ど家を壊す費用と同じである点を、納得できなかったようである。

しかし何度も考えた末、自分が遠いアメリカにいるので日本の事情にうといのを認識し、助手たちの判断に任せた。彼らへ送った返事は、草稿よりずっと簡潔に書かれていたであろう。帰国後約5年、平河町家屋敷は売却され、ライマンと日本の関係に一つの節目を付けた。

7. 中国への夢

日本の緊張した生活と異なり、英語で自由に暮らせるノースハンプトンの日々は快適であった。好きな語学、殊に中国語に力を入れ、時々、専門誌の依頼に応じて論文を書き、市の改善委員会委員長を勤め悠々自適の生活を楽しんだ。

帰国以来、短期間であるが、ペンシルベニア、オハイオ、ノバスコシア等の鉱山調査に従事し、1886年には、ロッキー山脈の地質調査を行い、主にコロラド州の石炭調査に8ヶ月、地図の作製に半年を過ごしている。時折、就職の話が持ち上がったが、ライマンが真剣に考慮した仕事はなかったようである。1883年、彼が1858年アイオワ州地質調査に参加した時の主任ジェームスホールから、伯父レスリーを通し、ニューヨーク州立博物館に來ないかとさ

そいがあった。数回手紙が交わされ、翌年2月18日、ライマンは、はっきり断っている。彼は中国へ行きたかった。しかし、北京公使や領事の話、中国政府下で開発する鉄鉱事業の話等を断っているのは、サラリーが少ないとか気乗りしない理由のみではなかった。おそらく、彼に中国の地質調査をした夢があったと思う。

桑田知明が1887年1月25日に書いたライマンへの手紙によると、西山正吾が時の逓信大臣榎本武揚にライマンのため、彼の知友李鴻章に中国政府へ地質調査開発を勧告していただきたいと言う内容の手紙を書いたらしい。李鴻章は榎本に「今は、省の知事にすぎないので、政府に献言できない。」と返事をしている。

8. 第二次ペンシルベニア地質調査

1887年3月下旬、レスリーは、第二次ペンシルベニア地質調査の予算9万ドルが州議会を通ることを予想し、甥ライマンの参加を打診した。彼は、ロッキー山脈地質調査報告書の仕上げや他の仕事があったので、即答を避けた。また調査所長の甥となる立場を意識し、給料と自分の資格や能力の関係、州の仕事の拘束等いろいろと懸念を抱き、慎重に話を進めたようである。

7月、レスリーから第二次ペンシルベニア地質調査に関する手紙を受け取った。最初に書かれた短い契約書に、ライマンの仕事が明記されている。バックおよびモントゴメリー郡の中生層の調査を行うこととペンシルベニア地質報告シリーズの一部として、その報告書を作成することの2項目である。

レスリーによる7ページからなる文書は、懇切丁寧で、ライマンが必要とするすべての援助を与え、何時でも喜んでアドバイスと援助をすると述べている。レスリーの器量、甥への信頼と温情を感じる文である。ライマンは、ポッツビルを本拠として調査を行い、民間事業のニューボストンの無煙炭開発にも従事した。お雇いの一人だったゴージョーに書いたライマンの手紙によると、ニューボストンは炭田の名で、ポッツビルから毎日通える場所にあっらしい。

安達仁造がフィラデルフィア地質調査所からライマン隊に加入したため、彼と師の文通が少なくな

Second Geological Survey of Pennsylvania.

J. PETER LESLEY, State Geologist,
1008 CLINTON STREET, PHILADELPHIA.

July 14, 1887

W. B. S. Lyman, Northampton,
My dear Sir

Please accept this as an official contract with you, approved by the Board at its last meeting, for a geological survey of those portions of Bucks & Montgomery Counties occupied by the Mesozoic formations, and a report on the same, for publication in the series of Pa. Geol. Reports.

Mr. E. B. Harden will provide you with a photographed copy of the topographical map of the Philadelphia Water Department, on the original scale of that map. — Also with one or more prospectus or printed sheets of the same as fast as they come to our office from Mr. Bacon's engravers in New York.

Mr. Harden can find for you also (in the trays in my house) mounted dissected township-maps of the two counties.

You can take from one of my copies of Grand Atlas, what sheets you need of W. D. Ingvillier's

第5図 第2次ペンシルベニア地質調査の契約書(フィラデルフィア自然科学院図書館蔵)。

り、彼が1889年8月帰国するまで、助手に関するニュースの手がかりがなくなった。

9. フィラデルフィア

帰国して6年目の1887年7月ライマンは、ノースハンプトンからペンシルベニア州へ移り、ポッツビルとフィラデルフィアを行き来する生活を始めた。日本でもとっていた最高の給料とは比べることはできないが、市街電車の運転手の週給が12ドルであった時代に、月給300ドルと他の収入を加えての暮らしはゆったりしていたと思っよかろう。

かつての首都フィラデルフィアは、優雅な大都市、学術芸術センターとして知られていた。伯父レスリーのサロンでは、最新のヨーロッパ地質学会の情報が得られたし、日本文化に興味を持つ人々が多く、ライマンの豊富な知識に耳を傾ける近代女性たち、演劇、講演、オペラ等文化活動が盛んで、フィラデルフィアの日々は、生き生きとしていた。殊に、大望を抱いてやってきた日本の若者と会うのが楽しみであったようだ。彼らのあふれるばかりの活力、欧米近代国家に追いつかねばと真剣に勉強する態

度、誇りと素朴さに、ライマンは、助手たちの姿を見たに違いない。

1888年夏、英米の排水技術調査の目的で、三池勝立開坑の責任者 団 琢磨がアメリカに来た時、ライマンは、「アメリカンマニユファクチャー」編集長ウィークやピッツバーク州地質調査所のアモスブラウン等に団を「博識あり、大へん感じのいい紳士である」として紹介している。この旅行で、彼は英国のデーヴィーポンプの存在を知り、遂に三池勝立坑湧水問題を解決した。

その頃、山脇永吾の甥 梶原長八郎が突然ライマンを訪れ、地質学の教を請うた。早速、彼の助手になったが、後、プリンストン大学に入学して神学を学び、日本キリスト教会の指導者として活躍した人である。この高潔な心の持ち主については、次の章で書く。

1887年12月、ライマンは、ウオルナッツストリート907番地の州地質調査所から、ローカストストリート708番地の家に移った。大正9(1920)年ライマンの訃報を聞き、佐川栄次郎が書いた「ライマン氏を憶ふ」に、明治44(1911)年、ライマンを訪ねた思い出を述べている。「低き赤煉瓦三階の粗末なる長屋の入口に、Benjamin Smith Lyman, Mining Engineer second floor と大きく書いた札がある。」と記しているのがローカストストリートの家で、当初、日本人留学生の憩いの場所であった。

10. 青年Toku

1887年、中嶋徳松は、15歳でノースハンプトンハイスクールに入学した。彼の部活動や日曜学校の奉仕は、ハンナとファニーの喜びと誇りであった。ライマンは、ポッツビルに移ってから、毎週送られてくるTokuの手紙を読み、後はすべて従姉妹にまかせ、時々、友達に聡明なTokuを自慢し、大学に行かせるとほめかしていたが、まだまだ先の話と思っていたようだ。

Tokuが二年生に進み、初めて週一回の手紙を怠った時、おだやかに毎週必ず書くよう注意している。フランス語を始めて忙しかったという理由が認められたが、再び約束が破られると、ライマンの返事が命令的になっていった。

しばらくして、ハンナからTokuに声楽の個人レッ

Toku Nakajima		Toku Nakajima	
NORTHAMPTON PUBLIC SCHOOLS.		NORTHAMPTON PUBLIC SCHOOLS.	
Report for the <i>Spring</i> Term, 1882.		Report for the <i>Fall</i> Term, 1882.	
In <i>No. 3</i> School.		In <i>No. 3</i> School.	
By <i>Henry H. Whipple</i> , Teacher.		By <i>H. H. Whipple</i> , Teacher.	
STUDIES.	MONTHLY REPORT.	STUDIES.	MONTHLY REPORT.
	AV. Mch. Apr. May June July Aug. Sept. Oct. Nov. Dec. Term Average		AV. Mch. Apr. May June July Aug. Sept. Oct. Nov. Dec. Term Average
Reading and Spelling	72 78 74 79 84 81	84 82 92 78 95 95 97	
Arithmetic	74 72	78 78	78 88 93
Grammar	78 78 84 87 88 88	78 110 20 24 26 25	
Geog.	74 100 95 91 90 88	74 88 88 82 84 85	
History	70 78	85 72	
Writing		90	
Average of Study	75 77 78 79	78 80 83	
Attendance	100 100 100	100 100	
Department	74 70 72	78 72 73	
No. of times tardy			
No. half days absence			
No. of demerits			

第6図 徳松の小学校通信簿(フィラデルフィア自然科学学院図書館蔵)

スンをさせたいがと、相談の手紙がライマンに送られてきた。その返事として「Tokuは、声楽のレッスンをとる暇はないはずだ。勉強以外に、日常の雑用、お使い、暖炉の火をつけたり灰をとったりする仕事、そして私に手紙を書かねばならない。実際にやっているのだろうか。それらの仕事は声楽を習うよりずっとTokuにとって大切だ。Tokuの代わりを雇うなんてもってのほかだ。彼が大人になったら、自活していかねばならない身である。これには、成長過程にある現在、精励の習慣、他の仕事と共に

肉体的労働の正しい観念を身に付けねばならないのに、あなたはそのことを知りながら、あまりにも心がやさしいので、実行できないのだ。それは、近視眼的親切だ」と、いつもはブルワー姉妹をいたわっているライマンの言葉とは思われぬほど辛らつな手紙を書いている。

ライマンはこの手紙で、彼が12歳か13歳の頃から数年、居間やキッチンに絶えず燃えている暖炉に薪を運び、ストーブに石炭を入れ、灰の処理をし、さらに牛の世話、馬小屋の掃除、乳搾り、数々の走り使い、また学校がひけてからも、Tokuよりもずっと勉強したことを回想し、最後に、ハンナを煩わせたことを詫びて、この問題を締めくくった。

この事件から4ヶ月余り後、ライマンは、ノースハンプトンのユニテリアン協会牧師のセントジョンから、Tokuをユニテリアンの牧師か日本への宣教師にしたいと希望を述べた手紙を受け取った。この返事の冒頭で、Tokuに話す前に彼に相談したことを謝しているが、その語調は何となく無礼さを感じさせるものがある。ライマンは、牧師推薦の話が相当進んでいるのを遺憾に思い、Tokuが日曜学校に通っていたことすら知らなかったうかつさを後悔し、Tokuがこのような問題を決めるのに十分な年でないとの意見を述べている。

文中のライマンの発言「最も大切な学校教育中、偽りと有害な概念を植え付けられると、後でその



第7図 赤れんがの家の庭。徳松画(フィラデルフィア自然科学学院図書館蔵)

概念を取り払うのに困難と時間がかかる」に、当時の彼の宗教に関する考え方がうかがわれる。ライマンは、19世紀後期の彼の仲間たちのように、至高と英知と思想の自由を重んじ、思想の自由、真理に反する宗教を否定した。

セントジョンのユニテリアン教会は、彼の祖父母の支持で、1825年、ノースハンプトンに設立された。人間の理性を尊び、聖書でなくキリストの倫理道徳を教えるリベラルな教会であったが、ライマンは、当時のユニテリアン教会の近代化した教義を十分と思わなかったのであろうか。

翌年3月、思いがけなく、若い女の写真を同封した安達仁造の手紙が届いた。ライマンは、Tokuと日本滞在中信頼したコック秋葉幸太郎の養女おつねとの婚約の話を手紙から軽い気持ちで聞いていた。しかし、彼女の両親からの正式の申し出が送られてきたのに慌てたが、前述の二通と異なり、むしろ楽しみながら、Tokuの婚約について冷静に返答している。彼独特の意見の展開は興味深い。

Tokuはすでにアメリカの習慣に馴染んでいるから、アメリカ流に問題を処置しなければならない。この国の結婚は、親同士が決めるのではなく、若者たちの意志でなされる。勝手に親が決めるのは、個人の選択の自由の侵害であると意見し、Tokuが16歳、おつねが13歳、両者とも婚約は早すぎる。

Tokuの場合、もし大学へ行き、成績がよかったら、卒業するのに4年かかる。そして結婚生活を維持する収入を得るまで、かなりの年が必要であるし、その間に彼は帰国する希望をなくすかもしれない。このようなアメリカの教育を受けていて、長い間婚約に忠実でありうるだろうか。もし婚約しながら、結婚しなかったら、おつねは婚期を逸するであろう等、多くの可能性を論じた。その他おつねの性格、交友関係、倫理観を知る必要や、結婚と相性についても述べている。ライマンの手紙としては珍しく、延々と3ページにわたった。結局、次回にノースハンプトンに行った時、本人に聞いてみることを約束した。ライマンは、今や青年徳松を認識せざるをえなかったに違いない。

Tokuは、1889年、ハイスクールの最後の夏休みを、フィラデルフィアでライマンの手伝いをして過ごし、翌年ペンシルベニア大学に入学した。

引用文献

- 注1 桑田権平(1937): 来曼先生小伝. 三省堂, 東京, 97p.
 注2 賀田貞一(1884): 米国地質測量紀事. 東京地学協会報告, 7, 149p.

FUKUMI Yasuko (2003): A note on Ryman (20) Ryman, 1881-1890.

<受付: 2002年11月5日>